



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園中学校・高等学校 校長 佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）、ワシントン補習授業校を経て、現職。

「いじめ」に遭わないために

帰国が間近に迫った子どもにとって、一番気になるのは、新しい学校で友達とうまくやれているかどうか、いじめられたりすることがないだろうかということでしょう。気になる話題だけに、いろいろな人がいろいろなことを言っていますが、中には、実際の子どもたちの生活をふまえていない無責任な情報もあり、それが不幸の原因になる場合もあるようです。外国へ移る場合、帰国の場合など、大きく環境が変わる場合には特に気をつけなければいけないこともあります。「いじめ」について、あらためて考えてみたいと思います。

◆ いじめのない学校

「いじめ」とは何かをはっきりさせることは、たいへん難しいことです。文部科学省は、毎年、各学校に「いじめ」があったかどうかの調査を行っています。そのときの「いじめ」の定義は、「子どもが一定の人間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」ということになっています。ところが、子どもの世界で、けんかをしたり、悪口を言い合ったりすることは、至る所で起きることです。そんなときには何らかの心理的・物理的攻撃を受け、そのために精神的な苦痛を感じることでし



オリエンテーション・キャンプで話し合う中学生

ようから、この定義を文字通り解釈すれば、「いじめ」の件数は莫大な数になるはずですが、もちろん、調査の目的は、子どもたちの間で短時間に解決してしまうような簡単な場合は含まず、大人も介入して一緒に悩まなければならないようなある程度深刻なケースを数え上げることなのですが、具体的にどのケースが深刻で、どれが深刻でないかは、調査の回答をする人が主観的に判断するしかありません。さらに、調査にあたっては、「いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行うよう徹底させる」ということになっています。つまり、だれもいじめるとはならず、周りから見て一人が攻撃されているように見えなくても、本人が「いじめられている」と感じれば「いじめ」と数えなさいということなのです。これも、子どもが「いじめられた」と訴えた数を全部数えればたいへんなことになり、かえって調査の目的には合わないことになってしまうので、どれを報告に含めるかはかなり主観的な判断にならざるを得ません。当然のことながら、「いじめを見逃すな」という姿勢が強調されるときは、いじめと判断されるケースが多くなるはずですが。

いじめに関する統計は、このようなあいまいな判断の積み重ねで出来上がっているのですから、数字をあまり信用しすぎてはいけません。

「この学校にいじめはありますか」というのもあまり意味のある質問ではありません。「我が校にはいじめはありません。」と胸をはる校長先生などにお目にかかることがありますが、先ほどの定義を厳密に考えれば、「いじめ」がない子どもの世界があるはずがありません。いろいろな悩みや課題に向き合いながらそれを解決していくことによって子どもたちは成長していくのですから、「いじめがない」と言い切ってしまうのは、子どもの世界を理解せず、子どもたちの悩みを正面から受け止めようという意識がないからかもしれないと、私などは思ってしまいます。